オピニオン

100年の森
――明治神宮物語

継承⑤

# 未来へ歩む「木を植える人々」

キャンパスのメインストリートを覆う森のような緑
＝27日、横浜市保土ケ谷区の横浜国立大（鵜野光博撮影）

道の両脇から伸びる木々が空で交わり、木々の足元には落ち葉が散り敷いている。明治神宮の参道を小ぶりにしたような道があるのは、横浜市保土ケ谷区の横浜国立大・常盤台キャンパスだ。メインストリート脇の看板は、ここが同大名誉教授の植物生態学者、宮脇昭さん(92)の「思想の実験場」だったと記している。

宮脇さんは、木を植える人だ。考案した「ポット苗」を使った植樹を国内外で広め、これまでに約1700カ所で約4千万本の植樹を手がけたとされる。横浜国大では周辺の通学路沿いの斜面にも森を造ることを提案し、ポット苗は12年後に小さな森になった。都市や産業立地に「土地本来のいのちの森」を再生することを緊急の課題として訴え、大規模でなくとも、家の周りのわずかなスペースでも植樹は可能だと説く。

ここで宮脇さんを取り上げるのは、その森造りが都市の持続可能な緑地という点で明治神宮と共通点があり、何より明治神宮の森もまた、100年前に寄せられた献木の植樹から始まっているからである。

## 失われた「本来の森」

宮脇さんは現在療養中で取材はかなわなかったが、指導を受けた植生管理士で東京農業大大学院博士課程の西野文貴さん(32)＝写真＝は「宮脇方式の植樹は、明治神宮で100年かかった森造りを、30年でできる可能性がある」と話す。

植樹を指導する宮脇昭さん
（IGES国際生態学センター提供）

横浜国立大の通学路緑化のため植えられたシイ、タブなどの苗　（IGES国際生態学センター提供）

宮脇方式では、その土地に本来生えていた木々の苗を密集して植え、他の樹種も交ぜることで競争と淘汰を促す。「最初の3年は草取り作業が必要ですが、その後は木々がどんぐりを落として森が成長し、手入れが要らなくなる」と西野さん。

この「本来生えていた木々」とは人の手が加わる前の植生で、専門用語で「潜在自然植生」と呼ばれる。宮脇さんは他の研究者らと昭和55年から10年をかけて日本全国の潜在自然植生を調べ、「日本植生誌」全10巻をまとめた。そこで分かったのは、照葉樹林帯で本来の植生が残っているのは0・06％しかないという事実だった。特に戦後、焼失家屋の再建のため針葉樹が全国の山に植えられ、本来の森は失われていた。

その中で、人間の影響をほとんど受けずに残されていたのが、神社とともにあった鎮守の森だった。これらの森は災害に強く、西野さんによると、東日本大震災の津波でも流されずに残った例があったという。宮脇さんが森の再生を「緊急の課題」とした理由の一つがここにある。

元東京農大学長で福井県立大学長の進士五十八さん(76)は「緑の問題を社会的に一般化したのは、宮脇さんの業績だ」と評価する。

## 日本の知恵を世界へ

宮脇さんは明治神宮の森の調査にも参加し、著書では「先人たちが知恵を絞ってつくった人工の森の世界最高傑作のひとつ」「現在の日本で最も理想的な都市公園として機能している鎮守の森の代表格」（「森の力　植物生態学者の理論と実践」）と絶賛している。

本来の森を最短距離で目指す宮脇方式に対し、明治神宮では献木のクロマツ（針葉樹）などを森の見栄えに生かしつつ、やがて照葉樹が主体となる150年の変移を計画。現実には前倒しで実現した。「潜在自然植生という概念がなかった時代に、将来の森を組み立てた本多静六先生たちはすごい」と西野さん。また、ともに植樹などの活動に取り組む瀬田玉川神社（東京都世田谷区）の高橋知明禰宜（45）は「日本の森造りは、SDGs（持続可能な開発目標）の視点からも、日本から世界に発信できる知恵では」と話す。

宮脇方式にも改良の余地があり、西野さんはさらに「自分の下の世代を育てなければ」という。木を植える人々は先人の思いを受け継ぎつつ、未来へ歩む。（「継承」おわり）

＝毎週金曜掲載

日本人の心
楠木正成を読み解く
産経ひなどで冊子販売中